

## 〈擬装〉による恭順と抵抗

―田山花袋「蒲団」後の岡田美知代の小説―

有 元 伸 子

はじめに

岡田（永代）美知代（明治一八年～昭和四三年）は、広島県甲奴郡上下町出身の女性作家であるが、一般に知られているのは、田山花袋の小説「蒲団」（『新小説』明治四〇年九月）や「縁」（『毎日電報』明治四三年三月～八月）に登場する女弟子のモデルとしてである<sup>1</sup>。美知代は、神戸女学院在学中に花袋入門を懇願する手紙を出して、明治三七年二月に上京、花袋から西洋文学を学んだ。だが、同志社の学生・永代静雄との交際が発覚したことにより、三九年一月、上下町に帰郷。翌年、師の花袋が小説「蒲団」を発表し、作中の中年の作家・竹中時雄⇨花袋、女弟子・横山芳子⇨美知代、その恋人・田中秀夫⇨静雄だと見なされたために、美知代はゴシップの渦中におかれた。その後、美知代は、大正末に渡米するまで小説や多くの少女小説を執筆し、『奴隷トム』（大正一二年、誠文堂、原著

はストウ夫人「アンクル・トムズ・ケビン」などの翻訳書もあるが、なかなか評価の機会に恵まれなかった<sup>2</sup>。そもそも彼女の仕事の全貌を知るための著作リストも存在しなかったのである。

論者は、「蒲団」の強力なフィルターを通して眺められつづけてきた美知代を等身大の女性作家として読み直すことを目指し、著作リストを作成して公開するとともに<sup>3</sup>、美知代が晩年に書いた生前未発表の原稿の翻刻も行なっている<sup>4</sup>。著作リストについては、いちおうの公開をした後にも新たな作品が見つかっており、今後も補訂していく予定であるが、美知代がこれまで知られている以上に幅広い創作活動を行っていたことが明らかになりつつある。リストを解析することによって、一作家研究にとどまらず、明治・大正期の女性職業作家の成立過程の解明や少女小説研究にも寄与できるだろう。

加えて、美知代の著作の様相が明らかになることにより、田山花

袋評価にも新しい視座が加わることが期待できそうだ。美知代は、晩年にいたってなお、花袋について、『恩は恩、怨みは怨み』だと語った。それは、単にモデル問題に巻き込まれて静雄ともども人生を狂わされたことに對する怨嗟というよりは、花袋の美知代への文化的支配に對する批判だったように思われる。例えば、花袋が「蒲団」や「備後の山中」において女弟子の故郷や言葉をとどのように表象し、美知代がそれによつてどのように反応したのか、日露戦後の国民国家形成期における〈地域性〉をめぐる花袋と美知代の攻防の様相から支配と抑圧の様が窺える。

さらに、自然主義作家・田山花袋の名を一躍高からしめた出世作「蒲団」の成立過程にも美知代の著作が大きく関与していたことを旧稿で指摘した<sup>7</sup>。恋愛事件による美知代の帰郷から「蒲団」発表にいたる一年半の期間における美知代の著作や花袋との間に交わされた往復書簡を精査すると、美知代は、小栗風葉の人気作「青春」（読売新聞）明治三八年三月〜三九年一月）に登場する煩悶女学生や青年像に強く影響されながら、書簡や日記の形式を利用して自身の恋愛の作品化を模索していたことが判明する。花袋はこれらの作品に目を通していたものの、それらを『主観的』だと批判して、美知代が自身の恋愛を素材として作品化することを禁じ、一方で自身自身が「蒲団」を公開したのである。いわば、「蒲団」は女弟子の書き物を参照し、あるいは篡奪する形で成立したのであった。

では、「蒲団」刊行後の美知代はどうしたのか。これまで、美知代が花袋を批判するのは、小説「ある女の手紙」（『スバル』明治四三年九月）や手記『蒲団』『縁』及び私」（『新潮』大正四年九月）といった、結婚して〈永代美知代〉の名で発表するようになって以降の作品だと見なされていた。たとえば、沢豊彦は、『美知代が花袋に對し最初におこなう批判は、「縁」連載終了後の明治四十三年九月、『スバル』誌上における一種の暴露小説「ある女の手紙」の公表によつてであった』と述べる。だが、本当に〈岡田美知代〉時代の作品には、花袋への批判の萌芽はなかったのだろうか。

美知代と花袋との関係は、各時期を通じて実に複雑に推移していく。『恩は恩、怨みは怨み』という言葉に象徴されるような、師との錯綜した関係と心理を、美知代はどのように作品に表象し、〈書く女〉としての自己を構築しようとしたのだろうか。「蒲団」発表までの美知代の書き物を検討した前稿（注7）に引き続き、本稿では、花袋の「縁」の作中時間のとば口に当たる時期、すなわち明治四〇年九月の花袋の「蒲団」発表から、美知代が再上京する明治四一年四月頃までの〈岡田美知代〉の作品を検討していきたい。

### 一 小説「小夜子」をめぐる——「蒲団」刊行直後

「蒲団」が『新小説』に発表された直後に、美知代は、「小夜子」と題する小説を執筆して博文館に送付している。美知代が博文館に

小説「小夜子」の原稿を送付した事実は、この小説について触れられた花袋の美知代宛て書簡(A: 36 明40・9・14)によって知られる。この花袋の書簡については後述するが、その日付から、美知代が「蒲団」を読んで間をおかずに「小夜子」を書き上げ、博文館に送付したことがわかる。「小夜子」は、生前未発表だが、現在、田山花袋記念文学館（群馬県館林市）に収蔵されており、同館刊行の『蒲団』をめぐる書簡集』に翻刻収録された（原稿No.1）<sup>10</sup>。

「小夜子」の原稿は全一二枚、加筆部分も含めて四〇〇字詰めに換算して一〇枚程度の短篇である。和紙にペン書きされ、冒頭の表題「小夜子」と署名「美知代」のみ毛筆で書かれている。紙にマスマ目はないが、下敷きを用いて執筆したらしく、一頁につき二四字×一〇行で整然と文字が並ぶ。細かい修正や欄外への書き込みも散見されるが、記号を付して挿入箇所がきちんと指示され、雑誌での公開を目指して書いたと思われる原稿である。

小説「小夜子」は、『新小説』に掲載された小説《ふとん》を讀み終えた女主人公の小夜子が、『あ、最う先生！』と悲痛な調子で『読みかゝった雑誌の上に打伏した』ところから始まる。《少くとも彼女の友達で此小説をよむものハさまで立ち入つての事情と云ふは知らずとも——その女主人公横山よし子こそは、小夜子其の人と、一目でうなづかれる》のだ。

《小夜子とても浦若い女の身の我が身の上をかゝれたと気付いては、一時驚いて嫌な気持ちのしなくてもなかつたか、流石文学に志すだけに、仕方無い、皆な自分で書かれるやうな事をしたんだもの、とのあきらめもついて、さまで辛いとは思はないのであるけれど、段々読み行くに従つて、悲しい、可憐しい、我が世の過去をまざくと、悔恨、追懐小夜子は高鳴る胸を抱きしめて、ともすれば爪へ兼つる涙に書物を汚した。

『何故、何故私は恋なんかしたんだろう、絶対的先生に信頼して居りながら、何故又彼の時人を恋ふことが出来たのか』

それにしても可憐しいのは四畳半の御書斎！

先生ハ今何を遊はして、あらうか何時ものやうに夜更くる辻を心ゆく御書見か、殆んど毎夜の様に御傍に召して我が為めいそかしい御研究の時間を割いて、教へて被下つたのは重にツルゲネーフの小説で、自分はそれによつて新生命を得、久しくミツシヨンスクールに於てくせつけられた虚偽的生活から脱しやうとつとめるのであったが、……それであるのに恋した男ハ同志社神学生！』

小説「小夜子」において、『ふとん』のモデルとされたことについては、『文学に志す』身としてさほどの辛さはないとされており、現に、書かれたこと自体への言及は少ない。

そのかわりに「小夜子」の全体を通して述べられるのは、一つは、《「ふとん」》を読んだことよって自然に想起したとされる、師への《追懐》・《可懐しい》気持ちの表明である。花袋の「蒲団」には、時雄が芳子に《イブセンのノラの話や、ツルゲ子<sup>ネ</sup>のエレ子<sup>ネ</sup>の話》をし、《芳子にはこの時雄の教訓が何より意味があるやうに聞えて》《基督教の教訓より自由でそして権威があるやうに考へられた》とある（二三）。美知代の「小夜子」は、こうした「蒲団」の記述に呼応するかのやうに、《先生》から親身に西洋文学の指導を受けたこととの重要性がまず語られる。さらに、《小夜子が師を慕う心、それハ実際普通以上——恋であつたかも知れぬ、いや確かに、崇拜の極、彼女は満身の愛を捧げた》とも書かれる。いっけん煽情的な箇所であるが、これも「蒲団」の《二人の關係は何うしても尋常ではなかつた》（一）といった、時雄が想起する師弟の情念への応答であろう。師の作品の中核にある「中年の恋」のモチーフは許容して引き受け、花袋よって造型された自身の像を、すなわち虚構に形成された像に虚構の中で応答しようとしたのである。

つづいて、《「ふとん」》の記述への不満も述べられる。《けれ共果して、小夜子の關係した男、かりに田中と呼ばれて居る青年は、作者の描いたやうな、彼様なイヤミ沢山な男であらうか、小夜子はこれが不平で、自分のよし子を詩化し過ぎて、さもく立派な美しい女の様にかいてあるのに引きかへ、これは又余り酷いと思はざる

を得なかつた》。《作者はいつも田中には殊更上方言葉をつかわせて居る》と、のちに「蒲団」・「縁」及び私」でも批判する方言使用問題が早くも浮上している（注6）。

さらに、「小夜子」では、離れて過す恋人への自身の現在の思いが描かれる。あつけなく都落ちした男に失望するとともに、過去に思い切った行動をとらなかつた自身をも責める。自分たちの恋愛の行く末を、風葉の「青春」と引き比べながら述懐し、《え、最う如何にでもなるが好い、私にハ文学と云ふかくれ家がある》と文学者として生きることを宣言して作品は閉じられる。

前稿で指摘したやうに、美知代は、自身の恋愛事件を小説化することを、花袋から「主観的」だと止められていたが、実際には執筆して青年雑誌に小出しに投稿していた。「御おとづれ」（『新声』明治四〇年五月）・「その月その日」（『文庫』明治四〇年六月）からの流れであれば恋愛の核心として書かれるべきできことは省き、「蒲団」が発表されて以後の心境を書き記している。おそらくは師が「蒲団」で書いた出来事と重複することを遠慮したのであろうし、あるいは師の作品とセットで読まれることを期待したのかもしれない。

美知代は「小夜子」によつて、「蒲団」に書かれた女弟子の像を許容できる範囲では引き受けて師への恭順を示しつつ、恋愛と芸術をめぐる煩悶を示した上で、書く女としての自己をアピールして、筆力も意欲もない「墮落女学生」としてミスリードされた自己像を

修正・再生しようとした。権力者の書き物によって受けた自身の傷を、書くことによって回復するとともに、あわよくば一挙に自身の力を示そうともくろんで書かれた小説だったのである。

ところが、「小夜子」は「文章世界」に掲載されることなく、美知代に返送される。花袋の「小夜子」への評価が知られるのは、明治四〇年九月一四日付の花袋から美知代にあてた書簡（A・36）である。このなかで、花袋は、『蒲団の件はまことに申し訳ない』と『蒲団の件』だと明示した上で、『何うか堪忍して下さい。如何やうな御詫をもする／おろかなる師より』と繰り返して謝罪の言葉を記している。だが、手紙の中心は、「蒲団」を発表したにもかかわらず美知代が自分を師と見なして小説「小夜子」の草稿を送ってきたことに安堵し、美知代を懐柔しようとするところにある。

『さらぬたに苦悶して居る貴嬢に一層の心配苦痛をかけて其罪万死も猶かろしと思ひました。変な気持ちか為て、気が奇々して、悲しくつて、そして何だか腹立たしい、痛切に文学者の不真面目といふことか思当つて、一方、これは仕方かない、芸術だ！と思ひながらも心が暗かつた。処が博文館に行くとき、『小夜子』の一篇が来て居た。これを読んで、暗い心が非常に明かになった。兎に角貴嬢が自己を没して、芸術として見て呉れた態度に、霧生の思がした。それと共に貴嬢が客観的、批判的態

度を甚だ感心した。何うか、この態度を深く保つて、實際のことに全然溺れて下さらぬやうに願ふ。人生は全然主観である。芸術は客観である。いかなる閱歴に臨んでも、びくともせぬやうでなければ、未来の閨秀作家にはなれぬと思ふ。』

花袋は、「蒲団」を発表したことで暗鬱だった心が、「小夜子」を読んだことで、明るくなったと美知代に書き送る。美知代から許されたと感じたという表明であろう。そして、『貴嬢が自己を没して、芸術として見て呉れた態度に、霧生の思がした』とか、『貴嬢が客観的、批判的態度を甚だ感心した』など、さかんに美知代の態度を褒めて、『未来の閨秀作家』になるために冷静でありつづけるように言い聞かせる。このように、花袋は、表面上は芸術家として出来事を見ようとする美知代の『客観的、批判的態』と作品とを評価しつつも、作品「小夜子」は雑誌掲載されるには至らず、一二月一日付の花袋の美知代宛て書簡（A・39）に同封して返送された。美知代が、『蒲団』刊行から間を置かず作品を書き、それを花袋の自宅宛てではなく、博文館宛てに送ったのは、おそらくは花袋が主筆を務める投稿雑誌「文章世界」に掲載されることを期待していたからであろう。にもかかわらず、「小夜子」は、花袋の手によって公開されることはなかったのである。

『蒲団』をめぐる書簡集』の解説において、花袋研究の第一人者

であった小林一郎は、花袋の思索が《極端に言えば、ミチヨのこの『小夜子』によって開眼された》<sup>11</sup>と言ひ、花袋が考え続けていた《芸術と実行》の問題、人生は「主観」で、作品は「客観」であるという考え方に決着をつけた<sup>12</sup>とさえも述べる。だが、それではなぜそれほどに優れた小説「小夜子」が花袋の手によって発表されることはなかったのか。小林が答えることはない。

おそらくは作家の道を閉ざされて失意のうちに帰郷した女弟子の姿を描いた小説「蒲団」の発表直後に、そのモデルが文学に生きることを宣言するなど、あつてはならなかったからであろう。花袋のプランの中に、再起して作家として自立していく女弟子の像は全く無かったものと思われる。

## 二 『蒲団』について「から」「老嬢」へ

—— 恭順な女弟子

「小夜子」以後、美知代は何を書いたのだろうか。「蒲団」が刊行された明治四〇年九月から美知代が再上京する明治四一年四月までの半年余りに美知代が雑誌に発表したのは、現在判明しているかぎり、七作品である。

- (1) 岡田美知代子「土手三番町」(「新声」明治四〇年一〇月一日)
- (2) 岡田美知代「夢現」(「実業之横浜」明治四〇年一〇月一五日)

(3) 横山よし子『蒲団』について(「新潮」明治四〇年一〇月一五日)

(4) 岡田美知代「紋附」(「文章世界」明治四一年二月一日)

(5) 岡田美知代「老嬢」(「文書世界」明治四一年四月一五日)

(6) 岡田美知代「日記の内」(同右)

(7) 岡田美知代「侮辱」(「女子文壇」明治四一年四月一五日)

このうち「土手三番町」と「夢現」の二作品は「蒲団」刊行前に執筆していたものと判断でき<sup>13</sup>、したがって実質的には五作品のみ。恋愛事件による帰郷から「蒲団」発表までの一年半の期間には、多い月には四本、のべ三二本の作品を精力的に執筆・投稿していたのと比して相当に少ない。一〇月から翌年二月の「紋附」掲載までに三カ月半もの空白があった事実からも、「蒲団」発表による美知代の心労の大きさがしのばれる。

「蒲団」の女主人公と同名の「横山よし子」名で「新潮」に発表された『蒲団』については、同時期に書かれた「小夜子」に記されたような煩悶はなく、師弟関係のごくごく表層だけを掬った書き物である。『蒲団』に書かれたことで《嫌な嫌な気持ちに泣いた《私》だが、《ですけれ共考へて見ますと、芸術ですもの、仕方がないではありませんか、芸術家としての花袋先生の態度はむしろ当然のこと、而も種々の情実を全然退けて専ら芸術のためにおつくしなさらうと云ふ其尊い御心、實に尊敬すべきでありますま

いか」と考え直す。最終部でも、『時雄が芳子に対する情緒、それを直ぐ事実と見なし、時雄は即ち作者自身で、「蒲団」は実に花袋先生の大膽なる表白である等と云つて居る人もあります相で、馬鹿々々しい、そんな事があつて堪るのですか』と、虚構の作中人物と現実のモデルとの關係を否定して、『花袋先生は聞えた真面目な正しい方で』《今の文壇にはまれに見る御人格です》と、花袋の人格的擁護の弁で閉じられる。この文章が掲載された事情は不明だが、自身が恭順な女弟子であることを表明するための、花袋への迎合的な文章であり、美知代はここで花袋に大きな貸しをひとつ作つたことになろう。

見てきたように「蒲団」刊行直後に美知代が執筆した二つの書物のうち、美知代が力を入れて書いて書いて花袋に送つた小説「小夜子」の掲載は見送られ、花袋擁護の文章『蒲団』について「が掲載された。その後、美知代の小説投稿はしばらく途絶えるのだが、その間も東京にいる花袋と上下町の美知代や岡田家との間では頻繁に書簡が往復していた。この間の美知代から花袋宛の書簡は現存せず、『蒲団』をめぐる書簡集』に収録されていない。一方、現存する花袋から美知代への手紙からは、文学に生きたいのに田舎に埋もれていることへの美知代の嘆きをなだめ、父母を説得してなんとか上京できるよりに取り計らうとの弁明に追われる花袋の姿が浮んでくる。

明治四〇年一〇月二三日付の書簡（A・37）では、『仰の通り貴

嬢は文学より他に遁路が無い、又私から言つても、貴嬢を一人前の立派な文学者にしなければ、今迄の責任が盡されぬといふものです』と述べ、『私から猶父君母君に申上てもよろしう御座ます』と申し出ている。その言葉通り、一月一日付で美知代の母宛てに書簡を送り、美知代が『もう／＼決して先年のやうなる感溺は致さず有髪の僧侶になりしつもりにて文学の爲めに一生を犠牲に供したしとのこと、次にこれさへ出来ぬなら、『如何にしても此儘に居るのが運命ならばむしろ自殺いたして相果候方ましかと存候』と申越し候』と書き送ってきたと記して、自分が美知代の兄とともに『監督』をするから再上京させるように勧めている。<sup>15</sup>

こうして、一二月六日付の美知代宛書簡（A・38）では、美知代の母宛てに『貴嬢出京のことについて一封手紙』を出したことを知らせ、五日後の一日付書簡（A・39）では、自殺をほのめかしたらしい美知代に対して、『これは、小生が天下に一人しか持たぬ門生の貴嬢の爲めに言ふなり。（中略）何んなことがあろうか、父母が出京を許さなかつても、小生は貴嬢の将来の爲めには全力を盡すべし、何んな相談にても相談相手になるべし。其故自殺など弱いことを為ては呉れ給ふな』と、美知代の再上京のために全力を尽くすことを誓うにいたる。

『蒲団』について「において恭順な女弟子として花袋をかばい人格者としての師の像を公に称揚したことが功を奏したのか、あるいは

は書簡のなかでの花袋への再三にわたる自殺をもほのめかしての情動的な働きかけによるものか、年が明けて明治四一年一月九日付の花袋から美知代宛書簡（A・40）では、いよいよ美知代の再上京に向けての動きが整いつつあることがわかる。それに伴い、花袋は、美知代の母親から依頼があったとして、永代との関係を絶って文学に専心してもらわなくては両親に対する《責任》からも《御世話は出来かねる》と、強く美知代の覚悟を求める。美知代の文学的な生殺与奪を握っている立場からの圧迫である。

《貴嬢か実際問題——ラブとか何とかいふこと——を離れて、有髪の僧侶として、熱心に専心に文芸の道に携はり得たまはゞ、師としての小生の喜悅不過之候、ラブは先つ一度度外に置くべし、（中略）何卒、徒らに感情的主観に走らずに、意志のつき、新派の女子の標本として奮ひ立たれ度、かへすゝも希望に候、日本には未だ自覚せる女子なし、何卒々々貴嬢はこの自覚したる悲痛なる女作家たらんことを祈り上候、貴嬢の如き既に人の娘としての資格を欠き、人の妻としての資格を欠き候ことゆゑ、この実世界を離れたる客観的世界に身を投ずるにあらすんは、遁るゝに路なきことと存候、何卒此辺の処よく御覚悟、十分御奮励のほど祈上候》

美知代の《決心》と《覚悟》を繰り返し求めたこの書簡に対して、一月一七日付の花袋から美知代の母・ミナ宛て書簡（注14）に、美知代から《爾来は全く芸術的生活を送り、實際問題に触れぬやうにする》旨の返事を得たことが記されており、美知代が花袋の書簡を落手するやすぐに花袋に誓いの文を発信したことがわかる。

現実の恋愛からは離れ、《有髪の僧侶》として《文学》に一生を捧げることを、最初は美知代が花袋に誓い、つづいて花袋が美知代に求めたことが、一連の書簡から見えてくる。有髪僧とは、《頭をそっていない僧。また、俗人で仏道を修行する者》（『日本国語大辞典』）だが、有髪の尼には《未亡人》や《縁切寺である》（鎌倉の東慶寺）にかけ込んだ、人の妻（同）の意もある。俗世の家庭の幸福に背を向けて、いっしんに修業するイメージであろう。

そうした《有髪の僧侶》のイメージの形象化が《老嬢》であった。「文章世界」の同じ号に掲載された「老嬢」と「日記の内」はいずれも、結婚が決まった喜びのうちにある年長の《其枝さん》と、田舎で煩悶して文学に救いを求めようとする《私》とが対照的に描かれる。「老嬢」で、私は、其枝さんばかりではなく、洋行帰りの女学校のエリート女性教員たちが三十歳を過ぎて結婚に焦って《安つばい御亭主》に甘んじていることなどを想起する。そして、自身もすでに《老嬢》だと感じて、若くして優れた作品を残した《一葉女史》を思い、《私だつて今死んでも好い、何か一つすばらしいものが書き度い》と《狂

人のやうに泣き叫んでも見度くなる』のである。

美知代にとっての《老嬢》のモチーフの重要性や同時期に島崎藤村らによって表象された《老嬢》との関連については別稿(注3)でも述べた。本稿では《老嬢》をモチーフとする小説「老嬢」と「日記の内」が、美知代の再上京が決まった後の明治四一年四月に、花袋が主筆の「文章世界」に投稿されたことに注意しておきたい。

「日記の内」は、煩悶する《私》に、先生から届いた葉書に記された短歌と、それへの返歌によって閉じられるが、これら二つの小説自体が、花袋に求められた《実際問題——ラブとか何とかいふ、こと——を離れて、有髪の僧侶として、熱心に専心に文芸の道に携はる約束を果たすという、美知代の花袋に見せるための決意表明なのではないか。花袋の方も、これらの小説を「文章世界」に掲載することで、再上京後の生活に向ける美知代の意志を公表して後戻りできないように示したのである。<sup>17</sup>

### 三 「侮辱」——擬装による抵抗

花袋が主宰する雑誌「文章世界」に、師が望む通りの《有髪の僧侶》たる《老嬢》の自己像を美知代が呈示した明治四一年四月一日。同日には「女子文壇」(四年一五号、臨時増刊「文壇の花」)も発行されている。巻頭で《声ある者はうたへ、血ある者は酔へ、芸術は自由の天地、汝自分の為の楽園である、汝は汝であつて他の何

人でもない》と河井醉茗が高らかに芸術至上をうたいあげた同号で、美知代の「侮辱」は短篇小説の最高賞・天賞を受賞している。グラビア「入賞作家の光彩」では、美知代の写真が最上部に、服部貞子(「水野仙子、短篇小説・地賞」、山田邦子(美文・天賞)とともに、名前入りで麗々しく掲載された。

「侮辱」は、親密な関係を結んでいた女性二人の間に男性が加わった三角関係の心理を、関西方言を効果的に交えながら描いた佳作である。東京に出てきた《私》(河田)は、神戸女学院時代の上級生・津村と偶然出会う。津村は同学年の山家千香子と津村の弟で早稲田の学生である敏と同じ家に暮らしていた。<sup>18</sup>そこへ私と同級だった清水千香子加わる。山家悦子と千香子とは、かつて学校で《チャレスト》(「デヤレスト」の誤植だと思われる)と呼ばれて《果ては何か忌はしい、怪しい関係であるかのやうに云ふらす者さへ》あるほどの親密な関係であった。ところが、千香子と敏が親しくなったというので、津村姉弟が留守の間に、山家が千香子を他家に預けてしまふ。帰宅した敏は、留守中の出来事を知り、《侮辱だ》と山家に憤る。山家の方も面上いっばいに淋しさを表していた。

小栗風葉によるらしい選評は、構成・笑い・会話・上方言葉などの《技術》を褒め、《此れはくらうとの作として檜舞台へ出しても恥かしくないもの》だと高評価している。《實際血を分けた姉妹でもよもや斯うまでとは思はれる位の親密さ、足袋から襦袢から、洗

濯物は皆なお千香さんが一人で引受けて、虚言か本当か、肌を巻くものさへ二人は一所だと聞きました」といった、同時期の「女子文壇」にしばしば描かれる女性同士の親密な関係を描いて読者の関心を引き寄せながら<sup>19</sup>、登場人物のセリフに、嫉妬・焦燥・憤懣といったそれぞれの感情を表出させてなかなか巧緻である。

見どころはそればかりではない。三角関係の末に、年長者によって年少の女性が退場させられ、恋人同士の仲が引き裂かれるという「侮辱」の人物構図には、「蒲団」に描かれた花袋―美知代―静雄の三者の関係と美知代の帰郷事件を想起せざるをえないだろう。

《私の云ふ事なんぞ些少も聞かなくなつて、本当に困つちまう、折角父様から頼まれて、万一の事が有つて御覧なさい、お郷里へ対して申訳ないぢやありませんか、私の気にも成つて頂戴、ねえ河田さん、私の心配するのが無理でせうか。》

せめて津村さん姉弟が帰宅するまで待つてほしいと懇願する千香子に対して、山家は自身の正当性の根拠を千香子の父親による依頼におく。《私はこれでお千香さんを監督の責任がありますからね》といった山家の主張は、「蒲団」の『温情なる保護者』たる竹中時雄が、その実は実家から委託を受けた《監督》《保護》《責任》を楯に芳子を圧迫する姿と二重写しであろう。男性である師の愛と嫉妬を、女

性同士の親密な関係にずらしながら、「監督者」花袋への風刺を表現するのである。

また、《此処に居ると墮落の恐れがある》と非難され、《折角監督して下さる山家さんに気採ましても済んから、それに私かて痛も無い腹さぐられるの嫌やもん、出て行くわ》といった千香子のセリフは、「蒲団」の芳子の心情を反映する。千香子を本人の意に反して他家へ移した山家に、『貴嬢は何故、何故僕を侮辱するんです』と敢然と抗議する敏は「蒲団」の田中の理想形であろう。「侮辱」では、方言を使うのは女性である千香子で、敏は水際だった共通語を使う。「小夜子」でも、『蒲団』、『縁』及び私』でも、美知代は、花袋が「蒲団」のなかで静雄をモデルとした田中に《上方言葉》を使わせていることに強く抗議する。共通語／方言の階層化された言語構造を内面化している美知代にとって、恋人が下位に位置づけられるのは我慢ならず、「侮辱」の中で密かに修正しているのである。

《私はこれでお千香さんを監督の責任がありますからね》と拒む山家に、敏は、《フ、ン、監督か、自分の監督も碌ずつば出来ない癖に、よく云へた》《良心に聞いて見れば好いつて事さ》と批判する。嫉妬のあまりに理不尽な行為を行なう監督者への、痛烈な皮肉である。さらに、最終場面には山家悦子の孤独を見た《私》に《夕暮の薄ら寒さ》を感じさせている。「蒲団」の結末の時雄の悲哀と相似形になるように作られたパロディにも読める。しかも、表層では、《批

評をしゃうと思つて読んで居るうちに批評を忘れて了うやうなのが真の芸術品かも知れない、選者は何の理屈もなく、欣んで此作者に月桂冠を捧ぐ」と選評に言わしめる技倆をみせており、風刺は底に潜ませている。

「侮辱」において、美知代は、書かれたことで傷ついた自身を、書くことによって回復しようとした。そこで選ばれた舞台が、女性投稿雑誌「女子文壇」であり、女性読者共同体のなかで自身の体験の共有による自己再生を企図した。とはいえ、それは男性選者の検閲を免れるために、もてる技量の限りを尽くして作られた風刺の形をとらざるをえない。たとえ螻蛄の斧であろうとも、弱者のもつ筆の力による一種の社会闘争だったのである。

### おわりに

飯田祐子は、明治四〇年代を、文学が《男性ジェンダー化》した時代だと統括した。<sup>20</sup>そして、《明治四〇年代以降の「文学」を支えるホモソーシャルな読者共同体を形成》した代表的な雑誌として花袋主筆の「文章世界」を挙げる。《文学的な男と女の連帯》で成立する「文章世界」が「文学」の中心に位置したのに対して、同時期の女性向け投稿雑誌「女子文壇」は《非文学的な女と女の連帯》として成立して周縁に置かれたという。小平麻衣子も、『女子文壇』内外で、一般的に女子には小説は不向きで、散文が向いているとい

う主張は多い」と指摘する。「文学」内部におけるジェンダー格差が生成されつつある時期なのであった。

ここまで見てきたように、昭和四〇年四月、美知代は、「文章世界」と「女子文壇」の二誌に小説を投稿した。男性同士の連帯の場たる「文章世界」には、主筆たる師の欲望を意識しながら、『有髪の僧侶』として文芸の道に精進する《老嬢》としての自己像を提出した。花袋の言う《自覚したる悲痛なる女作家》になることを誓ってみせたのである。力を入れて書いたものの掲載されることのなかった「小夜子」によって学習した結果、自身の生の煩悶の表出は封印して、師の検閲をかくぐり、男性共同体へ参入する道を模索し始めたのである。小説「老嬢」で『一葉女史』の名が憧憬の対象としてあげられるのは偶然ではない。男性ジェンダー化し、ミソジニーな同時代の「文学」場において、ただ一人例外的に高評価されていた女性作家が一葉だったからだ。

一方、美知代は、女性読者共同体の「女子文壇」には、監督者であることをたてにとつて女弟子に抑圧的な態度をとる師の姿を年長の女性に投影して風刺し、『侮辱』だと批判する人物に自身の恋人を代入した。風刺・パロディは弱者のとりうる権力者への抵抗の表現であり、技巧をこらして擬装された一種の社会的な闘争であった。そうして男性共同体への参入に際して、権力者の欲求に従って満足させなければならぬ居心地の悪さや不快感を癒そうとしたのである。

おそらく、美知代の不幸は、師の花袋の欲望の視線を常に意識し、承認されたいと願ひ、一方で師の検閲をいかにかいくぐって自己表出するかに腐心したことにあつたように思える。だが、それは美知代ひとりだけの問題ではないだろう<sup>20</sup>。美知代の場合には、男性・師・年長／女性・弟子・年少という形で先鋭に顕在化しただけである。

この後、再上京した美知代は『有髪の僧侶』たりえず、静雄との『実際問題』が再燃して、妊娠・出奔・同居・出産・別離・娘を里子に・復縁……と目まぐるしく状況が変えながら、創作を続けていく。子をもってからは少女小説にも多くの筆をそめ、飯田の言う「文学」場の『周縁』に身をおくことになるわけだが、その過程で何があり、何を書いていったのか。具体的な個人の闘争と社会的なジェンダー構造との絡み合う様相を、さらに別稿で検討していきたい。

## 注

- 1 美知代についての概略は、拙稿「岡田（永代）美知代研究の現況と可能性——〈家事労働〉表象を例に」（『日本近代文学館年誌 資料探索』一〇、二〇一五年三月）を参照。
- 2 近年ようやく再評価の機運が高まってきた。美知代の生家は二〇〇三年に上下町歴史文化資料館として開館し、美知代文学の普及と未発表原稿などの資料保存とをおこなっている（現在は府中市上下歴史文化資料館）。また、『新編』『日本女性文学全集』第三卷（二〇一一年、青柿堂）には、美知代の二作品（「ある女の手紙」「銭銅貨」）が採録され、吉川豊子による解説が付された。

3 拙稿（資料紹介）『中央新聞』掲載の推定・永代美知代作品「老嬢の告白」——付 岡田（永代）美知代著作リスト」（『内海文化研究紀要』四一、二〇一三年三月）

4 拙稿「〈資料翻刻〉永代美知代「国木田独歩のおのぶさん」」（『内海文化研究紀要』四〇、二〇一二年三月）

・有元伸子、板倉大貴、ダルミ・カタリン、萬田慶太、熊尾紗耶（『資料翻刻』永代美知代「デッカシヨ」(1)」（『内海文化研究紀要』四四、二〇一六年三月）

5 美知代が晩年に書いた生前未発表の手記「云ひ得ぬ秘密」は、宮内俊介（資料翻刻「云ひ得ぬ秘密」田山花袋記念館研究紀要一〇、一九九八年三月）と原博己（岡田美知代の素顔「梶葉」六、一九九八年七月）によって翻刻されている。

6 拙稿「地域性をめぐる攻防——岡田（永代）美知代と田山花袋の描くローカリティ」（『近代文学試論』五〇、二〇一二年二月）

7 拙稿「作者をめぐる攻防——田山花袋『蒲団』と岡田美知代の小説」（『日本近代文学』八八、二〇一三年五月）

8 「田山花袋の周辺——新資料、その読解」（『解釈』一九八八年一〇月→『田山花袋の「伝記」』青柿堂、二〇〇九年）。

9 「田山花袋記念館研究叢書第二巻『蒲団』をめぐる書簡集」（館林市、一九九三年）。本稿で引用する書簡は、一部を除いて同書による。記号番号は同書の整理番号である。



治三七年頃から明治四一年二月までの花袋から美知代の父母に宛てた書簡が収められている。この書簡集では、岡田美知代は横山芳子、父・胖十郎は兵蔵、永代静雄は田中のように、花袋以外の当事者は「蒲団」の作中人物にちなむ仮名で翻字されている。

15 美知代の兄・岡田實磨は留学経歴をもつ英語学者。明治四〇年九月、神戸高等商業学校教授から、朝日新聞社に入社した夏目漱石の後任として第一高等学校教授に転任し、東京の白山御殿町に住まった。

16 『夜先生よりお葉書たまふ。』／鶯のこゑまた寒き山中の里居淋しき人をこそ思へ。とあるに、今更ながら御情けの程悲しく、／いや恋し御歌誦しては侘仕の夕得堪へず涙流るゝ、』

17 花袋による選評は、「老嬢」を《主人公が客観して無いので、何となく物足らぬ。平面のやうな気がする。今少し傍に立つて書いて見たら好からう。文章は達者だ》と評し、「日記の内」も《達者な筆をとる》とあり、さほどの高評価ではない。

18 山家悦子は、現実に神戸女学院高等科に在籍者していたことが、神戸女学院の同窓会報「めぐみ」によって知られる。「めぐみ」第一八号（明治三一年八月五日）で紀元節の祝賀式の式次第に「祝歌 山家悦子」と記されるのをはじめ、行事に際しては役付で、文芸欄でも短歌が掲載されるなど、ほぼ毎号に登場しており、学校でも中心的・指導的な存在であった。

19 小平麻衣子は、「女子文壇」の投稿者たちが、男性選者の《女性にしかわからないこと》を知りたいという《覗き趣味的なまなざしをそそりつつ、いかにして検閲をすりぬげるかに腐心する》と指摘する（『女が女を演じる 文学・欲望・消費』第四章「けれど貴女！ 文学を捨てては為ないでせうね」——『女子文壇』愛読諸嬢と欲望するその姉たち）新曜社、二〇〇八年。

20 『彼らの物語 日本近代文学とジェンダー』序章 隠喩としてのジェンダー（名古屋大学出版会、一九九八年）

21 『愛読諸嬢の文学的欲望——『女子文壇』という教室』（『日本文学』一九九八年二月）

22 瀬崎圭二は、明治四〇年代に発表された「女流文学」論を検討して、《当時の男性中心主義的な文壇》が新人女性作家たちに求めたものが、《男性たちに「魔力」と呼ばれるような主体性を持ち、男性作家の模倣ではなく、女性の立場から女性問題を扱った表現》であり、《男性作家たちがリードする文芸思潮の模倣を批判されながらも、その模倣の中に現出する表現の中にしか女性性が認められないという女性作家たちの袋小路》を指摘している。（明治四〇年代の「女流作家」論と岡田（永代）美知代、『広島島の女性作家・岡田（永代）美知代に関する総合的研究』JSPS科学研究費報告書（33520227）、二〇一四年三月）

#### 付記

「小夜子」の原稿閲覧をお許しいただいた田山花袋記念文学館（群馬県館林市）、「めぐみ」を調査閲覧させていただいた神戸女学院大学図書館に、記して感謝申し上げます。引用に際しては、作品・書簡とも、旧字は新字に改め、ルビも大半を省略した。

なお、本研究はJSPS科研費（26370238）助成による成果の一部である。

——ありもと・のぶこ、広島大学大学院文学研究科教授——